



歓喜の街
カルカッタ

下

ドミニク・ラピエール
長谷 泰二 訳

LA CITÉ
DE LA JOIE

下

LA CITÉ
DE LA JOIE

ドミニク・ラピエール

長谷 泰二 訳

歓喜の街
カルカッタ

河出書房新社

Dominique Lapierre :

LA CITE DE LA JOIE (THE CITY OF JOY)

© 1985 by Pressinter S. A.

The Japanese translation rights arranged with Morton L.
Janklow Associates, Inc., New York through Japan UNI
Agency, Inc., Tokyo.

長谷 泰 (はせ・たい)

1944 年兵庫県に生れる。

東京大学大学院修了。

現在、明治学院大学文学部／仏文学科助教授。

歓喜の街カルカッタ (下)

© 1987 Printed in Japan

1987 年 6 月 10 日 初版印刷

1987 年 6 月 15 日 初版発行

著 者 ドミニク・ラピエール

訳 者 長谷 泰

装幀者 渋谷育由

発行者 清水 勝

発行所 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷 2-32-2

電話 (03)404-8611〔編集〕(03)404-1201〔営業〕

振替 東京 0-10802

印刷 暁印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

定価はカバー・帯に表示してあります。

落丁・乱丁本はおとりかえます。

ISBN4-309-20101-6

歓喜の街カルカッタ（下）○目次○

II 馬のような人間と火の車（つづき）

5

III わが愛しのカルカッタ

75

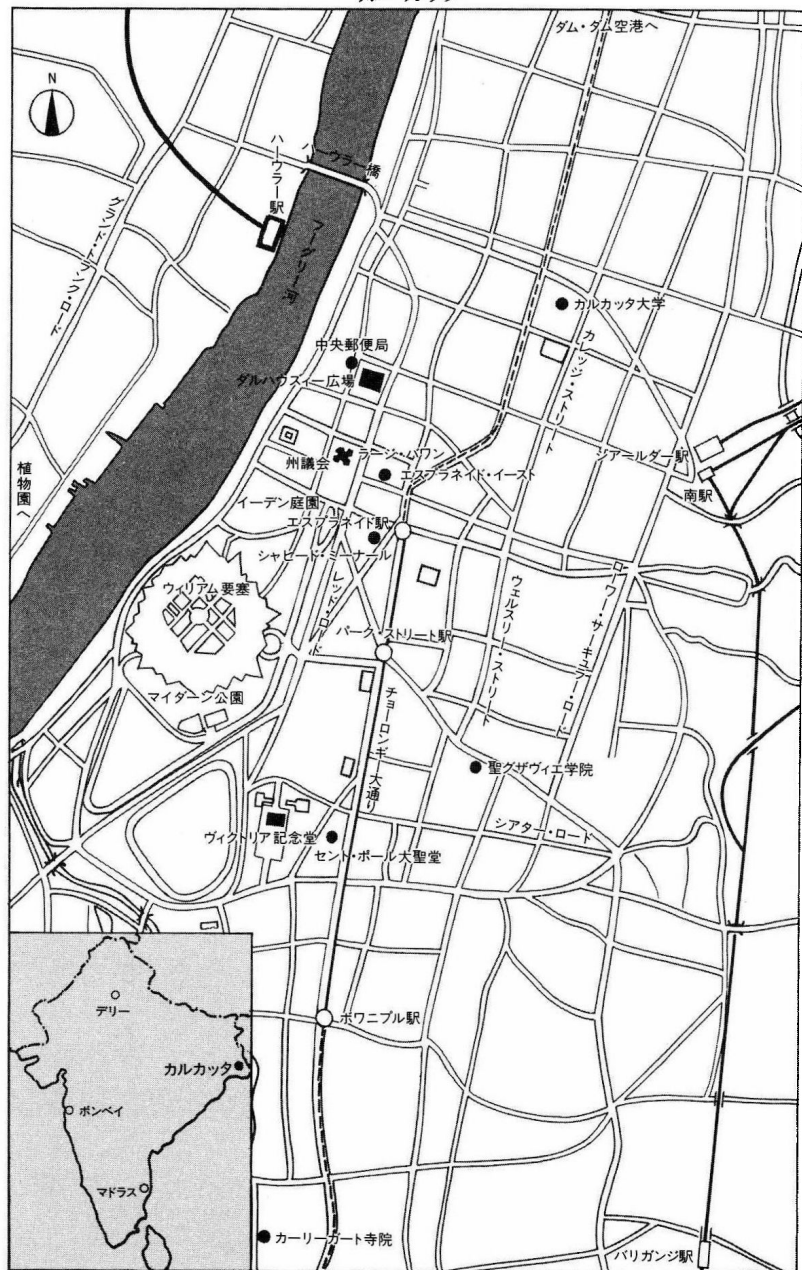
エピソード

263

訳者あとがき

269

カルカッタ



歓喜の街カルカッタ（下）

II 馬のような人間と火の車（つづき）



事態は悪化するばかりだ。混雑をきわめた渋滞が、ますます交通手段を麻痺させることが多くなる。とかく中心部の通りは、停電で止まった路面電車や故障したトラックでいっぱい、身動きがとれない。トラックのラジエーターから、まるで水柱のような煙がでている。車軸のこわれた二階建てバスが立ち往生し、横倒しになっているものもある。中心街のはずれでは、ぼろぼろの車体の黄色いタクシীর群れが、けたたましいクラクションを鳴らし、ぶんぶん飛ばしてつき進んでくる。水牛にひかせた荷車や、重い荷物を積んでつぶれそうになった手押し車や、頭に山のような商品をのせて運んでいる、おびただしいクーリーたちが、混沌としたなかをやつとのことと通りぬけている。どこにも歩くひとがひしめき、車道にはみだし、そこを走る人力車といさかっている。水道管や下水管がこわれ、車道はしばしば掘り返されたままになっている。あらゆるものが日に日にすこしずつこわれ、くずれてゆくように見える。「腹にナイフのきつ先をつきつけて、その日のあがりをだせ、という客だっているんだ」と、ハザリ・

バルは話す。「金を払うとき、げんこつでぶんなぐってゆく酔っぱらいがいる。グンダや娼婦らは走り賃を踏み倒して、姿をくらます。おつにすましたご婦人連中が小銭をごまかしたり、ただの田舎っぺが車をおりると、前決めの料金に文句をつけてくる」ある日ハザリは、為替の通信欄に父あてのちよつとした伝言を入れてほしい、とムンシーに頼んだ。「元気でやっている。人力車引きになって稼いでいる」と書いてもらった。自分にすべてを頼りきっている者たちに、こんなことができるようになったという誇らしい気持で胸がいっぱいだった。急いで、妻と子供三人が野宿している路上にもどる。その日は、妻たちに伝える大ニュースがあった。

「おい、女房！」アローカがしゃがんで、隣の女性の飯盒を磨いているのを見たたん、ハザリは叫んだ。「スラムに宿が見つかったぞ！」

スラム！ 田舎の者は毎日池で身体を洗い、小屋は清潔、食べ物に衛生的である。そんな生活をしたれた彼らにとり、水もなければ、下水道もなく、ときには便所さえもない貧民窟に住める見込みがついたとしても、それはけっして喜ぶようなものではない。だが、それでも路上生活よりはましなのだ。少なくともスラムには、鳥籠のような家の上に布きれがあり、トタン板があり、住まいのような雰囲気がかもしだしている。かりそめの宿ではあっても、きたる冬の寒さや、数か月後にせまったモンソンの大水を相手にできる避難所になる。

ハザリが三平方メートルほどの家を探しあてた貧民窟は、町なかにあり、マイダーン公園にそったチヨロンギー大通りの先にある。この貧民窟の由来は中国との紛争の時期にさかのぼる。避難民が数多く北部から、カルカタへと押し寄せてきたときである。何世帯かがある日、ふたつの通りにはさまれたこの台地に足を止め、みずばらしい荷袋をおろし、杭を打ち、陽ざしよけの布きれをはった。べつの世帯がこの最初のグループに加わってくる。こうして、小さな仮住まいから、居住地のまったただなかに

貧民窟ができた。市当局も警察もその地主も、だれもこれをとがめる者はなかった。すでに町じゅうにこのような貧困のしみが点々と現れ、そこに何百という故郷をなくした者たちが、ときには飲水施設もないままに生活していた。こうしたひとたちの生活の場がいくつかできてから、およそ二十年ほどになる。しかし、みながみなこの無断居住者たちに無関心であつたわけではない。着いたばかりの者たちは四角な泥地に居をかまえるや、だれもが金を脅しとられた。ここにマフィアの行なう驚くほど巧妙な、ゆすりの一面がある。彼らはこういうとき、だれか当局の者を買収し、その恩恵をうけるのだ。このまったく土着的なマフィアは、名高いイタリア・アメリカ的マフィアのモデルとくらべ、なんの遜色もないものである。

「引越しをする」まえに、もうハザリは小柄な片目の男の訪問をうけていた。男はそのあたりの「地主」、つまり地区のゴッドファーザーのかわりの者だと名乗った。きまつて手口は一樣で、はつきりしている。避難民がどこかに落ちつき、そこに粗末な仮小屋を建てると、かならずマフィアの代理人が、市発行の正式な取りこわし令状をもって現れる。そのときに、貧しい者たちは定期的な賃貸料の支払い、ないしは敷地購入をすすめられる。ハザリの場合、三平方メートルの土地について、五十ルピーの「権利金」を払うことを承諾し、各月前納の賃貸料二十ルピーを支払う約束をさせられた。こうした蛭のような者たちのゆすりは、なにも賃貸料とか、その他「滞在税」のとりたてにかぎつたものではない。事実、その統制は貧民窟の生活全般におよんでいる。唯一地もとの権力であるマフィアは、人びとの「保護者」を自任している。「保護者」とはよくいったものである。もめごとに仲裁が必要ときや、選挙の時期に割りこんでくる。票とひきかえに、特別な贈物をくばるのだ。たとえば、配給通帳、水道管の敷設、あばら家の改造による祠の建設、官立の学校への児童受入れ、といったようなものである。

こういう不思議な権力の合理性にあえて疑いをはさむ者は、容赦なく罰せられる。あばら家に火をつ

けられる。さらに、ナイフでめったつきにされた死体が見つかることもある。貧しい者たちの住むところならどこにでもつきものの、こうした専横ぶりにはさまざまな形がある。あるときは、じかに彼らが表にでてくる。ハザリの貧民窟の場合がそうだが、そこにはマフィアの片割れが何人か住んでいたのだ。建設現場とか、蒸溜工場とか、清掃場とか採石場の近くの地区では、マフィアはそうした企業の所有者や経営者を通じて、支配する。日々、住民たちが皿に盛る糧のために、頼らざるをえない事業主たちは、生殺与奪の権をもっているのだ。委員会や協会組織を通じて、マフィアが口をだしてくるところもある。こういう組織は組織といっても、マフィアに劣らず形だけのものなのだ。宗教的色彩をもつ団体であれ、出身カーストや出身地を共有する仲間の集いであれ、すべてがマフィアかその政治的関係筋がスラムのなかに深くくいこむ、かつこの隠れ蓑となっている。こうなれば、ことはもはや賃貸料とか税のとりたてだけの問題ではない。マフィアが家庭のことにまで裁きをつけ、罰金の額を決めたり、宗教上の祭りの寄付金を集めたり、結婚、離婚、養子縁組、遺産相続の話に加わり、宗教的な破門を宣告したりする。要するに、人びとの誕生から死までの儀式やしきたりをともしきる。十分の一税とでもいうべきものをマフィアに払わなければ、回教徒は死んでも墓に入れてもらえず、ヒンドゥー教徒は火葬もしてはもらえない。

夜になるや、バル一家は路上をあとにした。貧弱な持物を人力車に積み、大通りの角をまがる。こうして、新しい避難民の世帯がひとつ、それなりの場所に身を落ちつけた。

ボール・ランベールが便所からでてくると、とつぜん騒ぎがもちあがつた。わめく声がきこえ、子供と大人たちの群れが突撃するように駆けてゆく。石やさまざまな投げ物が神父のところをすれすれにかすめ、小さな建物のまわりに飛んでゆく。神父は跳びのきざま、このたけり狂ったような怒りのまとなっているものを見た。ぼろを着たかわいそうな女性だった。髪はばらばらで、顔はよごれて血まみれになっている。目には憎悪がこもり、やせ細った手と腕を動かし、口から泡を飛ばさんばかりに、獣のような叫び声をあげている。罵声をはりあげればあげるほど、群衆はいきりたつ。まるでスラムにこもっていた暴力が、一挙に爆発したかのである。歓喜の街がリンチを求めているのだ。フランス人は割って入ろうとしたが、だれかに肩をぐいとつかまれ、うしろに放りだされた。餌食の奪いあいになるうとしていた。男たちが脅すようにまえへつめ寄ってゆき、女たちはわめき散らし、けしかけている。むごいことだった。騒々しい群れのなかから、棍棒を振りまわしている、灰色の髪の子が現れた。ランベールはそれが、まむかいでティー・ショップをやっている老ヒンドゥー教徒だとわかった。棒を頭上にぐるぐる振って、不幸な女のほうへ飛びこんでゆく。防壁のように身体をはって、襲撃してくる者のほうに振り向いた。「この女に手をだすな！」老ヒンドゥー教徒は叫んだ。「神のおでましなんだ」

群がった人びとは茫然として、足を止めた。にわかにわめき声がやんだ。視線が全部、ひよろ長い背丈の老ヒンドゥー教徒に向けられた。そのあとわずかな間があったが、ランベールには永遠につづくかと思われるほど長く感じられた。ナイフをつかんだ襲撃者がひとり、老ヒンドゥー教徒に近づいた。まえにくると、凶器を捨て、ひれふして足に触れ、敬意のしるしに両手を顔にやった。そして、立ちあがると、くると右を向き、去っていった。ほかの者らもこれにならった。しばらくすると、ひと群れはなくなっていた。老人は気がふれている女性のほうに身をかめた。女は追いつめられた獣のような様子で、老人を見ている。老人はゆっくり、丁寧に、自分のシャツの裾で女の顔をふいてやる。そして、彼女を立ちあがらせ、腰をささえるようにして路地を歩き、自分のティー・ショップの物置まで連れていった。

ランベールが老ヒンドゥー教徒のむかいで暮らすようになってから、スーリヤ（太陽）という輝かしい名前のついた、この正義漢の話を知った。いまでこそ茶碗と湯わかしを手に行っているが、数年前は粘土玉をのせた石のろくろをひいていた。くるくる踊るように粘土玉がまわり、コップや壺や、杯や皿、祭式用のランプや瓶や、婚礼用の二メートルもある甕までもできてゆく。スーリヤはビリグリの陶工だった。そこは二百キロ離れたカルカタ北部の、人口千人くらいの大きな村である。先祖も代々の昔から、その村の陶工だった。陶工の仕事というのは、バラモンの神官や高利貸し同様、共同体の生活になくてはならないものである。どこのヒンドゥー教徒の家庭でも、新年を迎えるたびに、しきたりにならって壺を割る。子供が生まれるときも同様で、生命を迎えるしるしに壺を割る。ひとがなくなるときもかならず、死者が食器をもってあの世へ旅立てるように、とこれをする。婚礼のときもそうである。新婦の家では両親たちが、娘は親もとを離れて死ぬのだと思い、新郎の家では、若い嫁がきて、新しい家庭が生まれるというので、壺を割る。たくさんある祭りのときも、またそうだ。というのも、神々は

いっさいの地上のものがあらたまることを望むからである。ともあれ陶工の場合、仕事がなくなるおそれはない。

スーリヤと、そして、いっしょに仕事をしている息子ふたりをのぞけば、その村に職人は七人だけだった。どの工房も中央の広場に面している。鍛冶屋と大工がおり、築きずや罫がもつくる籠かごづくりがいる。宝石細工職人は「貯蓄ネックレス」と呼ばれるものに自分でデザインをほどこす。家庭に少々お金がたまると、主婦たちがここへ駆けこみ、自分たちのネックレスに銀のリングを一、二個たしてもらうのだ。そして機織職人と靴屋がいて、最後に床屋がいる。この床屋の腕は村民の髪を刈ることよりも、もっぱら彼らの家族の幸福を考えるとあるところにある。というのも、彼は村の仲人役が好きなのだ。スーリヤの工房をはさんで、二軒の露店がある。ひとつは食料品屋で、ひとつは砂糖菓子屋である。この菓子屋のミシュティ、つまり砂糖よりも数倍とろけるような甘さの砂糖菓子がなかったら、どんな宗教儀式も社会の儀礼も成り立たなかったことだろう。

その年のモンスーンの終わりが、ビリグリ村にある出来事が起きた。一見つまらないことのように思えて、だれもそのときは注意をはらわなかった。機織職人の長男で、カルカタへ働きにでているアショークが、妻にプレゼントをもって村に帰ってきた。贈物はハイヴィスカスのような色をした、プラスチック製のバケツであった。この僻地では、だれもそんな家庭用具をまだ見たこともない。軽くてやわらかな材質に、だれもが感嘆し、驚きと羨しさを感じながら、めいめいが手にとって見た。これが売りの物になると最初に思ったのは、食料品屋だった。三か月もたたないうちに、もう店の台には、何色かの似たようなバケツが飾られている。さらにコップや皿や水筒を加え、店主のあつかうものがふえていく。プラスチックはこの新しい市場を征服した。と同時に、これは村のひとりの職人には大打撃となった。あつというまに、陶工スーリヤの客がへり、一年たらずで、一家は貧困におちいった。ふたりの息

子と家族は故郷を離れ、町にでたが、スーリヤはまだ頑張ろうとした。同じカーストのよしみで、五十キロほど離れた村に、仕事を見つけた。そこはまだ、プラスチック熱におかされてはいなかった。だが、そのウィルスは活動をつづけ、やがてすべての村がこれに感染する。州政府はカルカッタの業者にプラスチック工場建設の認可まであたえ、一年後、その地方の陶工はすべて破産した。

望みをたたれたスーリヤは、こんどは妻とカルカッタへ向かう。喘息で苦しんでいたかわいそうな妻は、汚染した都市のショックに耐えられず、落ちぶれてたどり着いた路上で、数か月後に死んだ。フーグリーの河岸にある薪置場で火葬にしたあと、スーリヤはどうしてよいかわからず、長いあいだ河ぞいをあてどなくさまよった。ハウラー橋から二キロほどのところにきたとき、土手で粘土を籠につめている男を目にし、近づいた。男はアーナンド・ナガルぞいにある陶器工房で働く者だった。そこでは、使用ずみとなると割って捨てられる、把っ手のない茶碗がつくられていた。スーリヤは男と出会ったおかげで、もうつぎの日には、ろくろをまえにその小さな器を何百とつくりだしていた。この工房からは、歓喜の街の多数のティー・ショップに品物がおろされる。ある日、ファキール・バガン小路のティー・ショップを経営する回教徒が竹の梁に首をくくっているのが見つかった。自殺だった。もう長い手仕事はできないと感じていたスーリヤは、店の持主に会いにゆき、権利を取得した。以後オーム、オームと唱えながら、チュラーにミルク・ティーの湯わかしをかけ、ひねもすチュラーの煙を路地じゆうにたてている。老ヒンドゥー教徒はいたってやさしい、聖人のようなひとであったため、ファキール・バガン小路の住民たちもいつもながらの煙を大目に見ていた。

ランベールがここにきてまもなく、その隣人がたずねてきたことがある。額に両手をあわせ、ランベールの部屋に入ってきた。このまじめな男にはもうほとんど歯がなかったが、彼の笑顔はランベールの心にあたたかいものを感じさせた。腰をおろすようすすめ、ふたりは長いあいだ、黙ったまま見つめあ